

学校だより
特別号

学校教育目標：一人一人が輝き、共に生きる高松っ子の育成

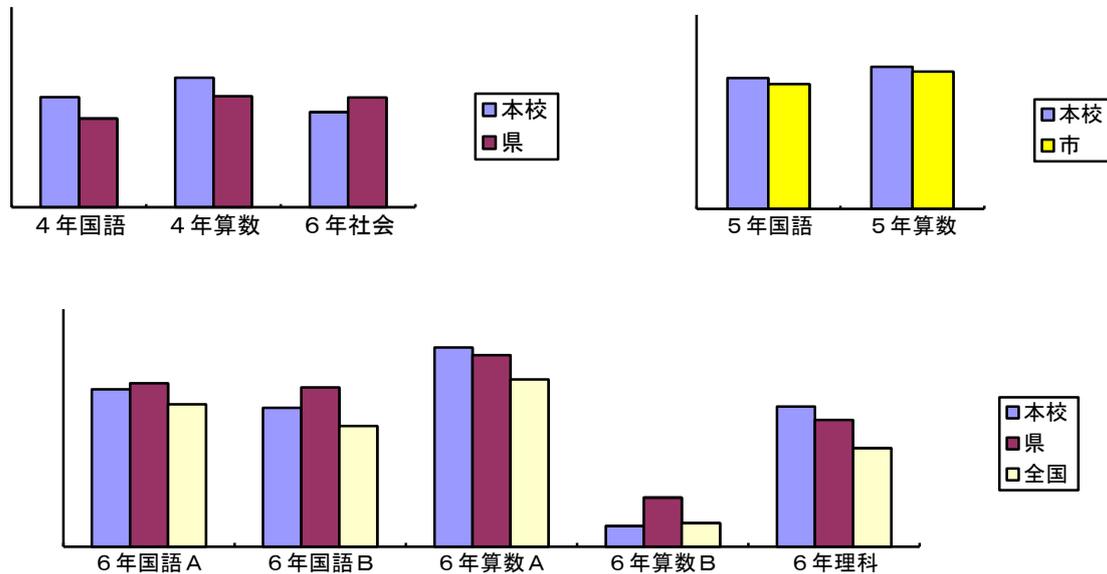
砂立

平成27年11月4日

かほく市立高松小学校
校長 山本 洋

今回の特別号では、4月に実施した今年度の4～6年生対象の各種学力調査（**市**：5年国語・算数，**県**：4年国語・算数，6年社会，**全国**：6年国語A・B・算数A・B・理科 ※Aは「基礎」，Bは「活用」）の結果と，その分析をもとに現在取り組んでいることの概要についてお知らせします。

下記のグラフは，本校児童の平均正答率と市や県や全国の平均値とを比較したものです。なお，昨年度もお伝えしましたが，この調査の結果でとらえる「学力」とは，個々の児童がもつ「学力」のすべてを示したのではない，ということをご承知おきください。また，全国，県，市で，調査内容は大きく異なります。並列的に示してありますが，数値等で単純に学年間の比較をすることのないようお願いいたします。



昨年度は，比較対象の平均正答率を上回ったものが多く，それまでの「一人一人があと1～2問正答数が不足している状況」からの改善傾向がみられましたが，今年度についても，概ね昨年度と同様の結果となりました。特に，4年は，2年連続で県平均を数ポイント上回っており，学力向上に向けた取組が，着実に成果となって表れてきているといえます。一方，6年の国語A・B・算数B・社会が県平均を下回りましたが，これは，成績分布が横に長い「なべぶた型」を示したことが影響しています。4，5年は，平均値付近に多くが集まる「山型」分布となっており，昨年度までの本校の課題であった学力の分散傾向は，学校を挙げての個別指導の充実などにより，少しずつ解消に向かっているといえます。

教科については，6年の結果をみると，理科が2年連続で県平均を3ポイント程度上回ったのに対し，社会科は県平均を3ポイント程度下回り，教科間で格差がみられます。一方，国語科と算数科については，A（基礎）が県平均とほぼ同じ水準であるのに対し，B（活用）が県平均より4～6ポイントも低いということが共通しています。

さらに，結果を細かく分析し，本校児童の学力の状況を次のようにとらえました。

- 各教科における基礎的・基本的事項の定着については概ね良好といえる。
- △身につけた基礎・基本を，問題の自力解決のために活用していく力が全体的に不足している。特に，「文章や図・表・グラフ等から必要な情報を手に入れ，問題の題意を把握する力」と，「複数の情報を関連付けて思考し，条件に合わせて適切に表現する力」の不足が大きな課題である。

児童の学力の向上に向け、現在、特に学校で力を入れて取り組んでいることを以下に示します。

- ・ペアやグループによる対話を取り入れ、学習用語を使って相手に説明したり、自分の考えと比べながら友達の考えを聞いて多様な観点から考察したりする力を身に付けさせる。
- ・問題文を読んで、分かっていることや問われていることを確認するために、線を引いたり図で表したりすることを習慣づける。
- ・3年生以上は、語彙を増やすために、国語辞典を用いて分からない言葉を調べる習慣をつける。
- ・授業の「まとめ」を、条件に合わせたり、キーワードを使ったりして書く時間を確保する。
- ・書いた文章を読み返す習慣づけをするとともに、友達と読み合い、推敲する場面を設定する。
- ・3年生以上は、毎週の「学習タイム」などで、活用問題に取り組み、その解き方に慣れさせる。
- ・毎週金曜日の掃除後に「ぐんぐんタイム」を設定し、以前に学習した内容のプリントなどを行う。
- ・隔週木曜日の朝学習で「短作文づくり」を行い、条件に合わせて記述する力や、高学年は新聞記事などを読んで自分の考えを表現する力を身に付けさせる。
- ・今年度も毎月1回「家庭学習&家庭読書チェック週間」を設定する。2学期からは毎月の重点を決め、これまで以上に保護者と連携を図りながら、児童の主体的な取り組みをはたらきかける。

その他にも、学校行事や児童会活動、なかよしグループ活動をはじめ、学習時間以外のさまざまな場面で、児童が主体的に取り組む姿が多く見られるよう、はたらきかけを積極的に行っています。登校してから下校するまでの全教育活動を、児童の活用力向上の場ととらえ、毎日元気に登校したくなる「楽しい」学校を、児童と一緒につくっていききたいと考えています。

保護者のみなさんへのお願い

今回の学力調査と同時に実施された質問紙調査からは、本校児童の生活面や考え方について、次のような課題が明らかになりました。

- △寝る時刻、テレビ等の視聴時間、遊びに興じる時間などをきちんと決めて生活している児童の割合が、県や全国よりも低い。そして、その分、読書に費やす時間が短くなっている。
- △新聞記事やテレビ等のニュースへの関心、社会や地域の出来事への関心が低い状況がみられる。
- △「自分にはよいところがある」「自分のことが好き」と肯定的にとらえる児童の割合がやや低く、自己肯定感が低い状況がみられる。それにともなって、自分が教師や家族、友達から認められていると実感できている児童の割合も低くなっている。
- △「物事を最後までやりとげてうれしかったことがある」「難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦している」と答える児童の割合がやや低い。また、「人の気持ちが分かる人間」や「人の役に立つ人間」になりたいと強く願う児童の割合もやや低く、成就感や自己有用感を十分に得られていない様子がうかがえる。

昨年度もお伝えしましたが、授業日数は年間約200日ですから、1日8時間の滞在としても、学校にいる時間は、年間のわずか18%に過ぎません。82%という大部分の時間の充実こそが、豊かな人間形成の基盤となることを、再認識していただきたく思います。そして、繰り返しになりますが、「勉強のことは学校(先生)に任せて」と切り離さず、ご家庭でも以下のようなことに取り組んでみてください。家庭と学校との連携が強まることで、児童の健全育成が促され、それがさらなる学力向上になって表れてくるものと信じております。どうかよろしく願いいたします。

- 望ましい生活習慣をつくり、それを継続する(時間や環境を管理できる子は集中力や忍耐力をもつ)
「静かな場所で学習する」「学習後すぐに翌日の準備をする」「午後10時にはふとんに入る」
「朝、登校の1時間前には自分で起き、朝食をきちんと食べる」
- 新聞記事やテレビニュース等をもとに家族で会話する(「関心をもつ」こと自体が「学び」と考える)
自分の周囲や遠い世界での出来事を知ることが、学びへの扉となり、それを家族と共有することで、「話す」「聞く」力は自然と高まる(新しい情報に遭遇したら、家族みんなですぐ調べる習慣を)
- 休日に「親子読書タイム」をつくる(読書が趣味に加わると一生の財産になる)
活字を目で追う習慣が「読む」力を高めるので、テレビを消しての共通の読書時間を設定する
※市の中央図書館や書店へと一緒に出かけることで、書物を話題にしての会話も生まれる
- 「お手伝い」を通して児童の経験知を増やす(学習と生活とを結びつける貴重な機会ととらえる)
買い物に同行したり、除雪を手伝ったりするだけでも、算数や社会、理科などに関する問題と出会うことができるので、積極的に仕事をあたえる(効率の悪さには多少目をつむる覚悟で)